

監修：白井市教育センター室学校支援アドバイザー 中澤孝子  
発行元：白井市教育委員会（生涯学習課 492-1111 内3433）

平成28年3月発行

「家庭教育通信」は、子どもたちの健やかな成長を願い、よりよい家庭教育について、皆で考え行動することを目指して、白井市教育委員会が情報を発信するものです。

## 本は最高の知育教育



もうすぐ春！日本中が素敵な花たちに囲まれ心がウキウキする季節がやってきます。

私もお花が大好きで、たくさんの苗を買い込み「早く大きくなりますように」「きれいなお花が咲きますように」と、水やりや肥料の施しと、今の時期はその手入れに余念がない毎日です。

しかし、その気持ちを裏切るような事態に見舞われることがしばしばあります。それは、咲くと期待していたのに、苗たちがぐったりしてしまうことです。

そんな時いつも思うことは、「お花の面倒をみることは、子育てによく似ているなあ」ということです。

まだ自分自身のことがよくわからない成長過程の時期に、厳しい勉強だけを課すのは、植物に肥料をや

りすぎるようなもの。花は、水や太陽の光といった成長においてまず欠かせない大切な栄養の前に、肥料ばかり与えてしまうと、茎ばかり育っていびつなものになります。しかし、水や太陽の光を最初にたっぷり与えれば、花はその花がさくべき時にきちんと咲きます。「今だな」という頃合いを見計い、もともと蓄えていたエネルギーをまさに今開花させるために、ぐんぐん伸びていくのです。

これは子どもも同じです。私がこれまで見てきた子どもの中には、さまざまなタイプがいます。

最初はそれほど目立った成績ではなくても、いざ本人がやる気になったとき、後の伸びる力がすごい子どももいます。そういう子は、小さい頃から本をたくさん読んでいる子がほとんどです。

読書により学力のベースが確実にできており、新しく学んだことを着実に積み重ねていくことができるのです。

将来、子どもの人生選択を子ども自身で希望どおりに叶えるために、絶対に欠かせない学力を十分つけるという基準で考えてみると、必ず習慣づけてほしいことがあります。

それが、「本を読む」ということです。これだけは、子どもが小さいうちから、できるだけたくさん、できるだけ熱心に親が働きかけてほしいと思

います。勉強の先取りが悪いわけではありません。ただ、それよりももっと大切で、もっとたっぷりと必要なのが読書なのです。基礎がつくられる時期に

「本」ととにかく与えてほしい。「読書」にかける時間をたっぷりつくってあげてほしいのです。「勉強ができる子だから、本を読む」のではなくて、実は「本を読んで理解することができるから、勉強ができる」のです。こういう子は、日本語理解能力、言い換えれば国語力があると言えます。これこそが学力の土台です。この能力を身につけさせる近道が「読書」であるとも言えます。





日本語ができる子は、小さい頃に日本語の根幹に、偶発的に当たっているのだと思います。これは、親の読み聞かせによって日本語の良い「音」に偶然に出会い大好きになっていくのだと思います。「絵本を繰り返し読んでいたら、知らない間に覚えてしまった」「そらんじるようになった」等それは、本当に偶然に起こることなのですが、こういうことが国語力を高めていくことにつながると考えます。

国語力は国語の勉強をすることによって身に付くものだと考えがちですが、言葉は生きているものです。実際の文章の中でどう使われるの

か、どう使いこなせばいいのかは、感覚的なものが大きいと思います。それを磨くには、生きた言葉が詰まっているもの、つまり本にあたるしかありません。

## 言葉は感覚的に！

本は楽しむための物であり、いくら読ませても、読んであげても、勉強嫌いになることはありません。子どもが小さいうちから、できるだけたくさん、できるだけ熱心に親が働きかけてほしいと思います。仮に小学生くらいまではあまり勉強していなくても、それまでの「読書量」の貯金がたっぷりある子は、小学校高学年や中学校くらいで本気になったら、ぐっと伸びるのです。「本をよく読む」とは「勉強ができる」と言い換えてもよいくらいです。

そのためにも学校では、いろいろなことに取り組んでいます。

### ①授業ではたくさん本を使います

まず、授業が変わってきています。すべての教科で言語活動の充実がうたわれ、たくさん本が、授業そのものに入り込んできています。楽しんで読む読書と共に調べ学習にも力を入れています。新聞をはじめ、たくさん情報を活用する能力の育成にも力を注いでいます。

ですから、学校図書室の役目が学習センターはもちろん情報センターとしての力も発揮する場となってきています。学校の図書室には「読書活動推進補助教員」がいて、その充実力を注いでくれています。市立図書館と学校との連携も強くたくさん本が物流によって子ども達の手から手にわたる仕組みになっています。

さて、これまでのお話で学力向上における読書の重要性についておわかりいただけたと思います。

### ②いつも本のある環境を目指しましょう

つぎは、それをどう実践していくかです。本を読む子に育てるためには、家庭の環境が大きな役目を果たすということです。よくユダヤ人は、ひらめきや発想が秀でていられるといわれますがとても優秀です。子どもの教育について聞いてみると、最も大切にしていることが「本をたくさんあげよう」「本でいっぱい本棚を見せよう」ということだそうです。

家庭のリビングに本でいっぱい本棚がある環境で育つことは、子どもの知的好奇心が刺激され、自然に読書の世界へと入っていくのです。「させる」「与える」のではなく、自然にそうなるように「引き出す」教育法なのですね。子どもがいつでも読める環境にあり、親子で一緒に楽しむこともできるわけです。おのずとたくさん読むようになり、賢くなっていくのです。できるだけ「本が家にあるのが当たり前」の状況をつくる努力をし、親が本を読む姿を子どもに見せ、親子で本の話がでるようになれば本物です。

肥料がじんわりときいて、やがて、素敵なお花が咲くこと間違いありませんね。

